

2009年(平成21年)

第13号

(1月15日)



発行所：立正佼成会 京都教会
 発行責任者：渉外部長 宮地啓安
 〒605-0041 京都市東山区三条蹴上
 TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

「京都教会発足50周年」－“絆”づくりに努めます

新年明けましておめでとうございます。昨年1月に本紙「平安月報」を発行して、おかげさまで、2年目に入ります。「人々を幸せにし、世の中を平和に導くために、共に考え、行動していただける方の輪を広げていくこと」を目的に、京都教会や本会が展開している取り組みについて紹介してきました。今年もご支援のほど、よろしくお祈りいたします。

さて、今年は京都教会が発足して50周年を迎えます。50年は半世紀です。「反省期」と言い換えることもできます。これまでを振り返り、良いところは伸ばし、改めるところは変えていこうと考えています。これまでの反省に立って、会員一同、より一層の精進に努めてまいりたいと考えております。

50周年記念行事として、京都から本部大聖堂に全員で参拝（本部団参）と教会発足50周年記念式典を予定しております。詳細は、後日お知らせいたします。（記念行事予定）

本部団参 5月16日（土）～17日（日）
 記念式典 11月1日（日）

これらを含んだ今年（平成21年）の主要行事について、以下お知らせいたします。気軽にご参加ください。

（京都教会平成21年次 主要行事予定）

- 1月18日～25日 寒修行
- 2月 1日 節分会
- 15日 涅槃会（仏教三大行事のひとつ）
- 3月 5日 立正佼成会創立記念日
- 4月 8日 降誕会（仏教三大行事のひとつ）
- 5月 9日 庭野平和賞シンポジウム
- 16日～17日 本部団参
- 7月11日 佼成ウインドオーケストラ公演
- 15日 盂蘭盆会
- 8月15日 戦争犠牲者慰霊、平和祈願の日
- 9月10日 脇祖さま報恩会
- 10月 4日 開祖さま入寂会
- 13日 日蓮聖人遠忌法要
- 11月 1日 教会50周年記念式典
- 15日 開祖さま生誕会
- 12月 8日 成道会（仏教三大行事のひとつ）

一食を捧げる運動 ～エチオピア植林事業～

「一食を捧げる運動」の浄財は、自主プログラム、共同プログラム、資金助成プログラム、緊急支援プログラムの4つに大別され推進されます。その中の同じ志を持つ外部の団体と共同して展開する合同プロジェクトの「エチオピア植林事業」を紹介します。

このプロジェクトは、主に資金や人材支援を行っています。また、毎年7月には植林ボランティア隊が2週間に渡りエチオピアを訪れ、実際に植林し、プロジェクトの視察を行っています。

エチオピアのティグレ州で本会と現地のNGOが、ともに協力し、苗木を植えるプロジェクトを展開。今、アカシアやユーカリの木が青々と茂っています。

このプロジェクトは、エチオピアのNGO「REST

（ティグレ救援協会）」と本会との合同事業として1993年から実施されています。

度重なる内戦、空爆によって破壊状態に陥ったエチオピアの村々。プロジェクトがスタートしてから今日に至るまでも、エリトリアとの領土をめぐる争い、大干ばつなどの影響で大地は危機にさらされています。

本会では、赤褐色の大地に緑を取り戻す手助けをし、また、エチオピアの未来を現地の人と共有するため、「一食を捧げる運動」の浄財をアフリカの大地に育つ木の苗木に充てています。これまでに支援された苗木は3600万本に及びます。

また、ボランティア隊が現地を訪れ、共に汗を流して植林を行ってきました。植えた苗木は1年で2メートル、2年で5メートルにも及び、現地の人々の「夢」をかなえています。

時 事 刻 々

今年も教会では、朝六時半からの元旦参りが行われた。初日の出とともに、一年の幸福と世の中の平安を祈願した。この早朝の参拝は「六方礼経」で説かれている教えに従い、心を清めるものとして実施された。昔のインドでのこと。早朝に、王舎城に住む長者の子供シンガラーカが六方（東西南北上下）を礼拝しているところを見られた釈尊が、その意味について教えられたものだ。

東方は父母。南方は師。西方は妻。北方は友。下方は使用人。上方は神仏。それぞれを拝み敬うことを通して、よりよき人生を築けると説かれている。

昨今、生活不安が広がり、世の中がすさみ、人心が荒れそうな模様が感じられる。このような時だからこそ、親子が、夫婦が、師弟が、友人同士が、労使が、お互いを信頼し合い、助け合うことが必要なのではないか。

今年も、例年以上に心清らかにして、周りの人との絆を大切に過ごせるようにしていきたいものだ。

2009年京都教会は発足50周年を迎えます。私たちは『多くの方との“絆”をより深めよう』をテーマに修行精進します。

諸宗教対話 ～開祖の願いをこの京都の地に～

宗教協力

昨年話になりますが、薬師寺さんで開催された第五回奈良県宗教者フォーラムに参加してまいりました。神道・仏教・キリスト教・新宗教からたくさんのお出でがあり、宗教・宗派を超えて様々な問題や課題に対し取り組んでいくというものです。今回は『日本のこころと宗教者の役割—神と仏と奈良の都』と題し、薬師寺の安田管主先生の挨拶のあと、前衆議院議員塩川正十郎先生の講演「経済的合理性の追求が中心の今の世にあって、心の豊かさを取り戻すための教育に宗教者の役割が非常に大きい」と題して述べられ、次にパネルディスカッションとして、秩父神社の藺田先生、薬師寺山田先生、帝塚山短大の青山先生が登壇され、

「神と仏と奈良の宗教」をテーマに意見を交わされました。

“まほろば”という言葉が聞かれたことがあると思いますが、大和の時代より神や仏を超えた日本人の心を表したすばらしい言葉を紹介頂きました。そして日本人の心と生活に根ざした文化（culture ギリシア語で耕す・祭る・飾が語源となる）、本来は神も仏もない神仏を敬いすべての物事にはからいやおかげさまを感じ、感謝の心を育むことが今の宗教者として役割があるんだと強く感じました。裏方として活躍されている若い世代の皆さんにもこの奈良発の宗教協力の輪がどんどん広がって行くんだらうと羨ましくなりました。そこで京都でも是非宗教協力の輪を広げたいと願い、行動に移す今年にしたいと決意いたします。

私のほのぼの日記（京都佼成議員懇話会に参加いただいている議員さん方のコーナーです）

府民とともに地域力再生へ

京都府議会 林田 洋

今、私たちを取り巻く環境は、米国発の金融危機が日本を含む世界経済に深刻な影を落とし、経済活動や雇用情勢が悪化するなど、極めて不透明な状況にいたっています。府内の経済情勢も急速に悪化し、企業活動や府民の暮らしにも影響が及び始めています。

京都府におきましては、地域社会の基盤となる地域力の再生を図りながら、安定した府民生活のために、「雇用、生活、産業基盤の整備」少子高齢化に対応した「保険、医療、福祉、教育環境の整備」さらに、「環境問題等」に対する施策など、「安心、安全、希望の京都づくり」につながる多くの課題に重点的に取り組んでいく必要があると考えます。

中央の政治情勢は混沌としたものがありますが、私は府民の暮らしを守るために、希望を持ち、活動を続けて参りたいと考えます。

原点に立ち返って

京都市議会 津田 大三

ご家族お揃いでの新春お慶び申し上げます。私は大晦日と正月三が日に比較的家族との時間が取れ、わが家の4人の子供達（8歳～2歳）と賑やかなお正月を過ごし、改めて家族の絆と大切さを感じる良い機会となりました。家族はコミュニティの最小単位、それが大切にされなければ良い社会を作れるとは到底思えません。私は自分の子供達に良い環境で育てて欲しいと願っています。それは自分の子供達さえ良ければと思っているわけではありません。そのために自分の住む地域、京都市や日本全体が良くならなければなりません。政治の原点はそこにあると思っています。家族を愛し、地域や国を愛することが、より良い環境を作るものと信じています。一人だけでは何もできません。同様に一人ひとりの力が無ければ良い社会も築けません。皆さんとともに考え、また行動していきます。

他教団活動紹介

（中外日報1月10日より）

●節会に十万人が帰参

天理教本部（奈良県天理市）で5日から7日まで新春恒例の節会が盛大に執り行われ、国内外から帰参した約十万人の信者や市民で賑わいました。

用意された材料はもち42トンのほか、水菜が約20ト、木炭が約9トなど。天理大学生や天理高校生ら延べ約5500人が接待に勤めました。

この節会は明治初年頃からの伝統行事。

京都教会 あの日あの時



昭和32年6月

まだ「教会」ではなく第39支部と言われていました。会員増加に伴って「京都連絡所」発足の頃の写真です。後の建物がコンクリートではなく木造なのが時代を感じます。皆さんの笑顔が輝いています。

仏教を生活に生かす 「日常生活の中の仏さまの教え」

《ありのままに観る — 実相》

仏さまの智慧とは、ものごとをありのままに見ることといってもいいでしょう。ありのままとは、そのものの本質を見るところ、**変化し移り変わるものごとにとらわれず、そのものの本質、すなわち実相を見ることです。**全体を正しく見る目、一方に片寄らない目ということでもあります。

庭野開祖はよく「ありのままがいいんだよ」と言っておられました。ありのままがいいというのは、「辛くても、今の状況をそのまま受け入れなさい」ということではなく、また「何もしなくても、そのままがいい」ということでもありません。それは「**仏さまのような智慧の眼で見れば、目の前にいる人や起こる出来事の奥に、必ず仏さまのはたらきを見つけ出すことができる**」ということなのです。

仏さまの目から見れば寂光土でないところはないのです。それなのに、われわれは**無明(根本的な無智)**によって見るために、迷いと汚れに満ちた国土に見えるわけです。ですから、この世を寂光土化するというのは、つまるところ、**人間のものの見かた、考え方を変えれば良い**わけです。

人はそれぞれ、自分なりの「ものさし」を持っています。ですから、ものごとの見方、受け止め方は千差万別です。そのとき基準にしているのは、ほとんどの場合、善悪や損得、自分の都合や好き嫌いといった世間的な常識や、自己流の考え方です。けれども、庭野開祖の言う仏さまの智慧の眼で見るとどうでしょう。煩惱を去るということにとらわれず、かえってその**煩惱を活用してよい方向へ向けること(煩惱即菩提)**によって、世の中をいきいきと活動させ、その活動のなかに調和をつくらうというのが、仏の智慧であります。

若いお母さんがいました。よき嫁、よき妻、よき母親であろうと、理想を持ち、自分なりにいつも努力していました。けれども体の弱い子供を授かり、いつも自分がいちばん困るときに、その子が体調を崩すのです。〈こんなに努力しているのに、どうして・・・。まわりはどう見ているのだろう〉そんな思いが頭をかすめます。そして何よりも、この子はこの先長く生きられるのだろうか、いつも不安でいっぱいでした。

そんな時、また子供が高熱を出しました。母親は親不孝を懺悔(サンゲ)すればよいのだろうかと思いましたが、けれども、自分は一生懸命親孝行してきたつもりなので、どうしても思い当たりません。どうにもなら

ず思いあまって庭野開祖にお聞きしました。

「どうしたら子供が熱が出さなくなるのでしょうか」とすると庭野開祖は「どれどれ、かしてごらん」と、母親の腕から赤ちゃんを抱き取り、「**そうかそうか、いい子だね。こうやって親を成長させて**」と、やさしく頭をなでて、しばらく赤ちゃんを抱きながら、「**親が育ててくれたご恩が分かるだろう**」と、言われたのです。それだけでした。

母親は、どんな厳しい言葉を頂いても、子供がよくなるためなら、という一心でお聞きしたので、少し拍子抜けするような思いでした。それでも、その時は「**そうか。親というのは、いろいろな苦勞しながら育てて下さったんだ**」と思いました。けれども、そう思えただけで、子供の熱はちっとも下がりません。それからその子を抱えて病院に駆け込むことのくり返しでした。

けれども、そういうことをくり返しているうちに、だんだん分かってきたことがありました。〈たとえお医者さまの隣に寝ていても、助からないときは助からない。それならば親としていまこの子を一生懸命に心配して、大切に育てさせて頂こう。とにかく愛情と真心で育て、自分自身が神仏の願いに沿うように毎日を生きていこう。それでいい。私にできることはそれだけだ〉

私たちは、苦を解決することが信仰だと思っていました。最初から、苦はいけないものという前提でスタートしていました。ものごとは思い通りに運ばないことのほうが多いでしょうから、「**こうあらねばならない、こうあってほしい**」と思うと、苦しみが増すばかりです。けれども、庭野開祖は、**その苦しみは仏さまのメッセージだから、そこから悟っていくんだよ**と教えて下さったのです。

仏さまの智慧とは、**ありのままを見通す智慧**です。そして、**ありのままを生かす智慧**です。嬉しいことばかりではなく、辛い出来事のなかにも仏さまの慈悲のはたらきを発見できたら、いまが価値のあるものとなります。そこに**幸せになる秘訣が隠れている**ような気がしてなりません。

仏さまのはたらきを見つけ出すのは難しいことかもしれませんが、常にもそのように見ようとアンテナを張り、**今を最大限に喜ぶ努力をし続けることで、智慧が磨かれるのです。**今を最大限に生かす智慧を磨くこと、それが私たちの生きる目的なのです。

庭野開祖の宗教観・平和観 「一乗の道」

《カブよい提言》

大会委員長に選出されたアンジェロ・フェルナンデス大司教は、開会式の挨拶でこう述べた。「戦争は宣戦布告によって始まるのではなく、軍備の進行とともに始まっているのです。軍備が人びとに戦争を思いとどまらせ、平和を生み出すのだという思い上がった主張を、宗教の声は権威をもって否定します。愛のみが平和を可能にするのです」

会議の二日目、「非武装」「開発」「人権」の三つの研究部会に先立っての全体会議で、基調講演の壇上に世界的な指導者が次々と登壇した。庭野開祖はその全体会議の議長を務めた。非武装、開発、人権は、別言すれば平和と発展と正義ということになる。ところが世界の現実を見ると、この三つは逆転して、戦争と貧困と抑圧の様相を呈していた。その意味で、**非武装、開発、人権をこの会議のテーマに選んだことは、当時としてはまことに時宜にかなうものであった。**

オランダのハーグに本部を持つ国際司法裁判所所長であり、第十六回国連総会議長を務めたムハマッド・ザフルーラ・カーン博士。ノーベル物理学受賞者である世界的科学者・湯川秀樹博士。ヘブライ大学の比較宗教学の権威ウェルブロウスキー教授。世界のプロテスタント教会を統合する世界教会協議会(WCC)事務総長のユージン・カーソン・ブレイク博士など、時代の英知を結集する、すばらしいメンバーだった。

湯川秀樹博士は「軍備なき世界の創造」と題する基調講演で、こう述べられた。「核兵器が出現する以前においては、戦争を一般的に否定する反戦主義、非暴力主義、無抵抗主義などは、非現実的な考え方と見なされてきました。戦争は好ましくないが、ある場合にはやむをえないという消極的肯定論から、正義の戦いには当然協力すべきである、という積極的肯定論にいたるまで、場合によって戦争は是認しなければならない、というのが多数意見でした。

しかし、米ソ二大国の保有する核兵器の総量が人類を何十回も全滅させうるものとなった状況のもとで、しかも、核兵器以外の化学兵器や生物兵器の大量殺戮性、残虐性が増大し、それがつねに核戦争に転化する可能性が存在している状況のもとでは、いかなる戦争

も、仮に正義の戦争であってもゆるされるものではなくなくなったのです」

当時、国連の核兵器白書によると、世界に蓄えられている核兵器は三千二百メガトンに達すると報告されていた。それは、通常火薬で最も爆発力の強い TNT 火薬三十二億トン分に相当し、地球上の人口三十二億人の一人に一トン分の火薬が用意されていることになるというのである。

「それなのに、なお正義の戦いという昔からの考え方が、今日もなくなっていないのです。現に、この地球上で戦争が行われています。戦争をしている国は双方とも、それぞれの戦争行為を正当化する理由を持っています。**第一の理由は、自分の国が信じている価値体系が相手の国のそれよりもすぐれているという考え方です。第二は、相手の武力攻撃を防がなければ自分の国や民族の存続が危うくなるという理由、つまり侵略に対する正当防衛の考え方です。そして第三は、植民地として搾取されることからの開放という理由です。**このような理由や事情があることを認めながらも、今後の世界においては、あらゆる種類の戦争を平和的交渉に置きかえなければなりません」湯川博士は、もの静かな語調で、しかし、決然と言い切られた。

ウェルブロウスキー教授は比較宗教学者として、**過去の宗教者の過ちをきびしく凝視し、現在も宗教が様々な形で社会の進歩を妨げていることはないか、**中東、ベトナムなどで現実に行われている問題をはじめ、これからの世界で宗教者が果たさなければならない役割について、勇敢に指摘した。

ユージン・カーソン・ブレイク博士の「開発」についての基調講演も、素晴らしいものだった。WCC 総幹事としての実践をふまえたその理論は、だれもが納得せずにいられない迫力を持っていた。この全体会議の基調講演をふまえて、参加者全員が「非武装」「開発」「人権」の三つの研究部会に分かれて討議に入った。それぞれの宗教代表が、自分の国、自分たちの社会がかかえている現実の問題を、ありのままにさらけだして、それに対して宗教者としてどう取り組むべきか、自分たちに何ができるかを、あくまでも具体的に語り合う白熱した討議が続いた。(つづく)

渉外部からのメッセージ

1月1日午前6時30分より京都教会において開催された元旦参りの式典には門川市長さん、民主党前代表の前原議員さんをはじめ、国会議員さん、京都府市議会から多数の議員さんの参拝を頂きました。

門川市長さんのあいさつの中に「京都を良くするためにお互い力をあわせて頑張っていきましょう」とい

う言葉が印象的でした。あくまで政教分離の原則に立ったものですが、お互いの立場の中で最大限の努力をしていきたいと決意を新たにさせて頂きました。どうぞ今年もよろしくお祈りします。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。 RKK 京都教会 FAX 075-762-2266